

一身独立未だならず、いはんや

澤田裕翔さわだゆうと

(埼玉県／埼玉県立川口北高等学校二年)

私達は「門閥制度は親の仇」と言い放った一人の青年の悔しさを忘れてはならない。これは単に、一人の人間の感慨に留まらない。この世界を覆う不条理に対し、内なる自然(人間性)から抗議が噴き出したものだ。

言い放った青年・福澤諭吉が、推し進めた近代化の行き着いた先(現代)において、社会階層が再び固定化されつつあると知ったら、何を思うだろうか。

一 福澤がZ世代(私達)に見るもの

社会学者の佐藤俊樹はその著『不平等社会日本―さよなら総中流』において、「実際、日本のW雇上2世のなかには、みずからの力によらないという事実にはまいったく気づかない人もいる。」と指摘する。「郊外の

こげいな住宅地に生まれ、有名私立小学校から進学校に進み、有名大学を卒業して、大企業の幹部候補生やキャリア官僚になっていくなかにはW雇上(ホワイトカラー・エリート)以外の世界を全く知らない人もいるだろう。平等社会の神話につかっただけですべての人が自分と同じように生活していると思ひ込んでいけば、みんなまったく同じ条件で競争していると考えても不思議でない(注1)と。本書は二〇〇〇年出版である。

また、教育学者の荻谷剛彦はその著『教育と平等』において、「同じ指標と二〇〇七年の学力テストの平均正答率との相関関係を示したのが、表5-8である。先ほどの一九六二年の結果とは大きな違いが見られる。県の財政力や一人あたり県民所得と、

テストの正答率との間には、ほとんど有意な相関関係が見られない。財政面や経済面で見た県の豊かさと学力テストとの関係がほとんど消えているのである。それに対し、生活保護世帯の比率は、〇七年でも同様に、負の相関関係を示している。つまり、県全体の豊かさと学力との関係はほとんどなくなつたのだが、貧しい世帯比率の高い県ほどテストの得点が低くなるという傾向は四十数年を隔てて残っているのである(注2)と主張する。本書は二〇〇九年出版である。

二〇一七年、アメリカでは地方の白人貧困層の支持を元にドナルド・トランプが大統領に当選し、世界的に格差問題がよく論じられるようになった。しかし、アメリカではトランプ大統領誕生前より格差問題があつたからこそ彼は一定数の支持を得た訳である。

日本においても、出版年からして二〇〇年以上、経済格差、階層の固定化が論じられてきた。これらは、経済が成熟した国によって生じる世界的傾向だ。つまり、経済格差の拡大、階層の固定化は、日本だけに限った問題ではない。

だからといって、「それなら仕方ない」

と言わないのが、福澤論吉である（海外に行きなければ、直談判して威臨丸に乗り込むような人である）。福澤は「努力は、「天命」さえも変える」と言う。所与の条件だからといって、唯々諾々としなない。理性の力で困難を乗り越えていくという姿勢からして、近代に生きるにふさわしい理想的な近代人だったと言えよう。これはただの同義反復ではなく、容易いことではない。なぜなら、仮に私達に「現代に生きるにふさわしい理想的な現代人とは、どのような人間像か」と問われても、答えに窮してしまう。渦中にいる者は、渦の本質が掴みにくいものだ。にもかかわらず、福澤は的確に時代の精神を掴んでいた。

福澤が的確に時代の精神を掴んでいたのは、「一身独立して一国独立す」という言葉から窺える。近代化は、「近代的個人主義の確立」と「近代国家（議会制民主主義による中央集権国家）の確立」の両輪によって、成し遂げられる。ただ、両輪の連関は、現代においてさえ、見えにくい。

官吏ではなく、私塾の創立者であった福澤は「近代的個人主義の確立」に尽力した。「近代的個人主義の確立」に尽力したいがために、「門閥制度は親の仇」と憤怒して

いたかつての自分と同じ境遇の者を支えるために、在野で奮闘した。

それ故、「独立の気力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、人を恐るる者は必ず人にへつらうものなり」「自ら勞して自ら食うは、人生独立の本源なり」など、「個人の独立」に関わる発言を数多く残している。

さらに、福澤にとって、「近代的個人主義の確立」は二重の意味がある。すなわち、「経済的独立」と「精神的独立」である。

「経済的独立」のため、福澤は言う。「古典の『古事記』を暗記していても、こんにちの米の値段を知らないのでは、日常生活の知識すらない男というほかない。中国の古典の奥義をきわめても、商売のやり方を知らず、取引ひとつできぬようでは、収支の知識の間屋にすぎない」と。

確かに福澤は机上の学問より実学の大切さをよく説いた。

それでは、福澤の実学志向は、私塾乙世代（概ね一九〇年代半ばから二一〇〇年代序盤あたりで生まれた世代）のコスパ志向（物を専ら「投入コスト」に対し、パフォーマンス（成果）が効率的か」という指標によって測る志向）と通底するだろうか。福澤は否定すると思

う。

それを論ずる前に、福澤の言う「精神的独立」の内容を見ておこう。これについては先に引用した「独立の気力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、人を恐るる者は必ず人にへつらうものなり」に福澤の姿勢が表れている。見落としてはならないのが、ここには「誰だつてへつらう者にはなりたくない（はずだ）」という暗黙の前提が潜んでいる。つまり、「精神的独立」は第三者から促されて求めるものではなく、「内なる自然から湧き上がって求めるもの（のはずだ）」という暗黙の前提が潜んでいる。

これは、思想家のジャン・ジャック・ルソーがその著『エミール』において、「教育は生命とともにじまるとのだから、生まれたとき、子どもはすでに弟子なのだ。教師の弟子ではない。自然の弟子だ。教師はただ、自然という首席の先生のもとで研究し、この先生の仕事じゃまされないうようにするだけだ」（注3）と主張すること、福澤の主張は呼応している。それもそのはずで、これは偶然ではない。ルソーには他にも『人間不平等起源論』を著している。こちらではルソーは「人間は本来、平等で

あったのに、文明のせいで不平等になってしまった」と主張している。「門閥制度は親の仇」と言う福澤と思想的親和性が低い訳はない。両者とも、近代社会をかたちづくっていく牽引者の役割を担っていたからこそ、前時代への批判の口調も自然と似通ってくるのだろう。

このようにして、経済的にも、精神的にも独立した個人によって成り立つ近代社会についての福澤のイメージは「社会共存の道は、人々自ら権利をまもり幸福を求むると同時に、他人の権利幸福を尊重し、いやしくもこれを侵すことなく、もって自他の独立自尊を傷つけざるにあり」である。

ここでようやく、先の問い（私達Z世代のコスパ志向と通底するだろうか）に立ち返れる。確かに福澤は実学を推奨している。その著『学問のすゝめ』においても、「古来漢学者に世帯持の上手なる者も少なく、和歌をよくして商売に巧者なる町人も稀なり。これがため心ある町人百姓は、その子の学問に出精するを見て、やがて身代を持ち崩すならんとて親心に心配する者あり。無理ならぬことなり。畢竟その学問の実に遠くして日用の間に合わぬ証拠なり。されば今かかる実なき学問は先ず次にし、専ら

勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」(注4)と主張している。

だがそれは、経済的独立を成し遂げるための前段のステップである。これまで見てきたように、福澤は経済的独立と合わせて、精神的独立を考えている。更にその先の課題として「近代的個人主義の確立」と「近代国家の確立」の両立を見据えている。つまり、福澤にとって理念なきコスパ志向は無意味である。

いくら労力の割に収入のよい(コスパのよい) 商売方法を学んだとしても、それが「近代的個人主義の確立」と「近代国家の確立」につながっていかなければ、福澤にとって「実学」とは呼べぬ、似て非なるものだろう。

二 アファーマティブ・アクションの意義とその先にあるもの

階層の流動性を適度に保つことは難しい。あまりにも流動性が高過ぎると社会が不安定になる。逆に、あまりにも流動性が低過ぎると社会が硬直化し息苦しい。しかし少なくとも、実学を学び、実践できる者の多くが安定的な地位にいられる程の流動性を、「一度、学問に入らば、大いに学問

すべし。農たれば大農となれ、商たれば大商となれ」と言う福澤は望んでいただろう。

とはいえ、階層の流動性は、経済、社会制度、文化等が複雑に絡まり合った社会構造の問題であり、人為で簡易に変えられるものではない。しかし、だからといって、「それなら仕方ない」と言わないのが、福澤論吉である。

そもそも福澤はその著『学問のすゝめ』において、「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」(注5)と述べている。『学問のすゝめ』自体が、階層がより流動的になることを促す趣旨の書であった。江戸幕府が大政奉還し、明治政府により四民平等の世となったにふさわしい社会像を示した。

それから時代が下った現代、高度経済成長期を経て、経済的な大きな伸びしろを失った先進国(日本を含む)は徐々に、階層の流動性が失われていった(同時に、人種問題などとも硬直化していた問題が積み残されたままだった。それらが、経済停滞とともに顕在化しつつある)。

そこで各国は、階層の硬直化への緩和策

として、アフアーマタイプ・アクション（積極的正措置）を導入している。人種問題や貧困問題で苦しんでいる人達に対し、進学や就職において積極的正措置を導入している。試験の点数だけではなく、受験者の社会的弱者としての地位も含めて、入学や入社が判定される。

アフアーマタイプ・アクションに対しては、「弱者としての地位をもって点数が加算される一方で、同等の努力をしても加算されない者がいるのはフェアな競争ではない。逆差別ではないか。新たな差別（しかも公的差別）によって、既存の差別を是正することは、論理的・倫理的に許容されるのか。個人を尊重する近代法の前提からして許容されないのではないか」という意見もある。

日本でも、学費の減免制度や奨学金制度の使い方によって、場合によっては、所得の低い世帯の方が学費の支援をより多く受けられ、私学に行きやすいということもある。

しかしここで、先の荻谷の言葉「貧しい世帯比率の高い県ほどテストの得点が低くなる」という傾向は四十数年を隔てて残っているのである」を思い起こすべきだ。

私は次の二点の理由により、アフアーマタイプ・アクションは肯定されるべきだと思う。

1 私達は、歴史的責任を負うから。「私」は個人であると同時に、「私達」という共同体（この場合、日本社会）の一員である。この共同体は、歴史的存在である。私達は、過去の日本社会からの恩恵を受け、生活している。そうであるならば同時に、過去の日本社会からの負の遺産も引き継ぐなければならない。引き継ぐ主体は私達しかないのだから。

福澤は「人は他人に迷惑を掛けない範囲で自由である」「自由と我儘（わがまま）との界は、他人の妨げをなすとなさざるとの間にある」と言う。これらは自由論や処世訓としてだけ受けとめるのではなく、問題構造に歴史という軸を入れて、受けとめ直すべきだ。

過去からあつた問題に、今も抜本的な解消をできていない私達が是正措置を導入するのは当然の理である。

2 私達自身の権利を守るから。

アフアーマタイプ・アクションを導入す

るのは、端的に私達自身のためでもある。是正措置の行使は、私達自身の権利である。私達はいつ自分や自分の家族が、社会的に苦しい立場になるか分らない。自分の子が成人したときに、孫の学費を捻出できない状況になっているかもしれない。

政治哲学者のジョン・ロールズがその著『正義論』において、「社会的・経済的不平等は、次の二条件を充たすように編成されなければならない。(a)そうした不平等が、正義になつた貯蓄原理と首尾一貫しつつ、最も不遇な人びとの最大の便益に資するように。(b)公正な機会均等の諸条件のもとで、全員に開かれている職務と地位に付帯する(ものだけに不平等がとどまる)ように」(注6)と主張するのもこの意味からだ。

これは、先の福澤の自由論からも理解が得られやすいだろう。他人に「迷惑」や「妨げ」を与えず自由に生きるには、単に迷惑をかけずに生活していればよいというだけではなく、私達が既に与えてしまった(未だ回復させられていない)迷惑や妨げを少しでも取り除く必要がある。

貧富の隔たりなく地元の子らに接し、博

愛精神に溢れる母に育てられた福澤も、ア
ファーマティブ・アクションを肯定するだ
ろう。しかし、福澤はおそらく、学費の免
除や奨学金の給付だけでは満足すまい。

経済的に苦しい世帯も、私学に行きやす
くなり、進学を選択肢が増えるかもしれな
いが同時に、先の佐藤の言葉「平等社会の
神話につかたまますべての人が自分と同
じように生活している」と思い込んでい
れば、みんなまったく同じ条件で競争して
いると考えても不思議でない」を思い起す
べきだ。

学費問題が是正されても、学習環境の格
差問題までは是正されていない。

例えば、入試問題は試験が終われば公表
されるので、解答法も受験生全般にすぐ
に共用される。その故、試験となれば、学校
は点数の優劣を付けねばならないことか
ら、入試問題は毎年、少しずつ難しくせざ
るをえない。これは受験制度を設けた時点
で生じる構造的必然である。

論者によつては、学習環境の格差問題を
過小評価する向きもあるだろうが、三〇年
前の問題と見比べても、格段の情報量を覚
えなければならぬ。自治体によつては近
年、塾代を補助するようになったが、これ

はその背景の一つだ。塾に行ける者と、行
けない者の間の学習環境の格差を少しでも
縮めようとする試みである。

ところで、「学問のすゝめ」を説く福澤
だったが、けして教条的なすすめではな
かった。福澤は「学問の本趣意は、読書に非
ず、精神の働きに在り」という言葉も残し
ており、知識や暗記に偏重しない、柔軟な
姿勢を持つていた（西洋文明にキャッチアッ
プすることに国の命運がかかっていた時代背景
を考えると、驚くべき柔軟さだ）。それでは、
そのような学問をどのように学ぶかとい
うと、「学問は米をつきながらも出来るもの
なり」と言う。しかし当然、福澤は学問を
修めることを甘く考えていた訳でもない。
「賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざると
によつて出来るものなり」と手厳しい側面
もある。

近年、各大学で「論文評価を主とする入
試」などユニークな入試が増えている。こ
れには、「少子化がすすみ、受験生が減り、
より柔軟な評価が可能になった」という背
景もあろう。これによつて、学習環境が劣
位であっても、海外ニュースや哲学的命題
など、物事をあれこれと考える者にとつて
門戸がより広く開くことになった。「精神

の働き」を重視する評価方法は、以上のと
おり本稿で述べた時代的・社会的意義を踏
まえて、より評価されるべきである（そし
て、福澤論吉を祖とする大学が、多様な生徒を
求め、論文コンクールを設け、ユニークな入試
の導入に積極的なのは、歴史的必然とさえ言え
る）。

三 根なし草の現代人は、モダニズムの夢 を見るか

社会学者のデイビッド・リースマンはそ
の著『孤独な群衆』において、現代人の特
徴として、他人指向型を指摘している。そ
の内容は「他人指向型の人間のもっている
一番重要な心理的レバーは、不定的な『不
安』なのである。この制御装置は、ジャイ
ロスコープではなく、レーダーにたと
えるのが、適切であろう」（注7）である。

このような現代人（他人指向型の人間）の
姿は、ポスト工業化社会に見られる世界的
傾向ではあるのだが、「それなら仕方ない」
と言わないのが、福澤論吉である。汲々と
周囲に合わせる私達、経済的自立の項で論
じた、理念なきコスバ志向の私達は、福澤
から見れば、独立した個人ではないだろう。
福澤論吉が今の日本を見たら、「近代化

未だ、ならずや」と慨嘆に堪えないだろう。

そもそも「近代化未だ、ならずや」どころではない。階層の硬直化は、身分制社会への逆戻り、福澤の時代より後退しているときえ言える。

しかし、アフアーマティブ・アクションをはじめとし、希望があることも、見てきたところだ。

明治という新時代を迎え、奮闘した福澤も多数の困難に見舞われた。しかし、格闘した福澤の言葉は、驚く程、バランスに優れたものであった。

政治については、「政治は悪さ加減の選択である」と、現代にも通じる警句を述べている。

処世訓としては、「顔色容貌の活潑愉快なるは人の徳義の一箇条にして、人間交際において最も大切なるものなり」「水があまりに清ければ、魚は棲めない。人は知的であり過ぎれば、友を得るのが難しい。友人を受け入れるには、度量が広く、多少ほんやりとしているところもあつたほうがいい」「人生は芝居のごとし、上手な役者が乞食になることもあれば、大根役者が殿様になることもある。とかく、あまり人生を重く見ず、捨て身になって何事も一心にな

すべし」と、屈託のない大らかさを見せる。

そのようなバランスの取れた発言をしつつ同時に、「理想が高尚でなければ活動もまた高尚にはならない」「やってもみないで、『事の成否』を疑うな」と志の高さも見せる。

福澤が今の日本を見て、真に慨嘆するとしたら、私達がバランスを見失い、志を捨てたときである。福澤から「まだ、そうではない」という声が聞こえるのは、私だけではない。

参考文献

(注1) 佐藤俊樹、『不平等社会日本——さ

よなら総中流』中公新書、二〇〇〇年、

一〇九—一〇ページ

(注2) 荻谷剛彦、『教育と平等——大衆教

育社会はいかに生成したか』中公新書、

二〇〇九年、二三—五ページ

(注3) ジャン＝ジャック・ルソー(著)、

今野一雄(訳)、『エミール(上)』岩波

文庫、一九六二年、八七—九二ページ

(注4) 福澤諭吉、『学問のすゝめ』岩波文庫、

一九四二年、一一—一三—一四ページ

(注5) 福澤諭吉、『学問のすゝめ』岩波文庫、

一九四二年、一一—二二ページ

(注6) ジョン・ロールズ(著)、川本隆史

／福間聡／神島裕子(訳)、『正義論』紀

伊國屋書店、二〇一〇年、四〇三—四〇四ページ

(注7) D・リースマン(著)、加藤秀俊(訳)

、『孤独な群衆』みすず書房、一九六四年、

二二—二四ページ